

# 第二世代の帰還移住過程における構造的制約

——グアムの日本人青年を事例に——

芝野 淳一

近年、日本人の海外移住が多様化するなかで、自発的に移住先に長期滞在・永住する人々が増加している。それに伴い第二世代の「日本への帰還」のあり方も多様化している。本稿は、グアムの日本人青年を事例に、長期滞在・永住家庭の第二世代が帰還移住過程において経験する構造的制約について検討するものである。結果、かれらはその就労において、自らのルーツの確認や帰属意識の獲得などを目的に、自発的かつ個人的に日本への帰還を試みていた。しかし、移住過程において、日本側の「受け入れの文脈」—労働市場、エスニック・コミュニティ、移民に関する政策—から排除されると同時に、グアム側のそれに包摂される（引っ張られる）ことで、日本への帰還が困難になっていたことが明らかになった。本知見が示唆するのは、日本への帰還に際して困難を抱える「グローバル・ノンエリート」としての第二世代の存在を議論の俎上に載せること、そしてかれらの移住経験を複数の場所における構造的・制度的文脈との関係において解釈することの重要性である。

## 1 はじめに

本稿は、グアムの日本人青年を事例に、海外に長期滞在・永住する日本人移住者第二世代の「日本への帰還」（＝帰還移住）をめぐる経験について、構造的制約に着目して検討するものである<sup>(1)</sup>。

人々のグローバルな移動が活発化する現代において、出生国とは異なる場所で生活を営むことは決して珍しいことではない。海外移住する日本人は2015年時点で131万7,078人にものぼり、年々増加傾向にある（外務省「海外在留邦人数調査統計」）。

海外移住する日本人家族の第二世代（子世代）<sup>(2)</sup>に関する研究を担ってきた領域のひとつに「海外・帰国子女研究」がある。そこでは、戦後急増した日系企業の駐在家庭が直面する教育問題が取り上げられてきた。親の赴任期間を終えると同時に帰国するエリート層としての駐在家庭の子世代を（Goodman 1990=1992）、

日系移民など従来の「移民」とは異なる特殊な移動形態と階層的背景をもつ人々として対象化し、1980年代から1990年代半ばをピークに膨大な研究を蓄積してきた（小林1983; 佐藤1997; 渋谷2001; 額賀2013など）。そこで重要な議論となってきたのが、海外に暮らす子ども・青年たちを日本にスムーズに接続させるための方途であった。全国の多くの高校や大学に帰国生特別入試制度（以降、帰国生入試と記す）が設置されていることや、帰国生の日本への受け入れをめぐる制度的問題を扱った研究が着実に積み重ねられていることは（佐藤2005; 稲田2012; 井田2015など）、その証左であろう。海外・帰国子女研究は、まさに「日本への帰還」を主題としてきたのである。

このような、国際移動する日本人移住者が不利益を被らないための教育のあり方は、一部の特権層の「優遇措置」であると批判を受けるほど丁寧に議論されてきた（Goodman 1990=1992）。その結果、親の仕事の都合で移動させられる子

どもが日本に帰還する際に不利にならないよう、手厚い支援策が講じられてきた。このような背景より、海外から日本に帰還する第二世代は、比較的恵まれた、日本の国際化を象徴するエリートであると表象されてきた (Goodman 1990=1992)。

他方、1990年代前後より、「自己実現」など経済的・政治的理由ではない個人的な理由によって自発的な海外移住を試みる日本人が増加している (長友 2013; 松谷 2014; 吉原ほか 2016 など)。かれらは、日系企業の現地採用者や自営業者として移住先に暮らす長期滞在・永住者である。日本人の海外移住のあり方が多様化するなかで、このような「新しい移住のかたち」(長友 2013) が登場しているという事実は、これまで特定の階層的背景と移住形態を有する駐在家庭にのみ焦点化してきた当該研究領域の見直しを迫っていると言える。

これまで長期滞在・永住する日本人の第二世代が海外・帰国子女研究の範疇に入ってきた理由として、次のようなことがあげられる。すなわち、自らの意志で海外移住する長期滞在者・永住者は土着化志向が強く、日本を離れ移住先に同化・現地化していくとみなされていたのである (関口 1983; 江淵 1994)。かれらは祖国を離れて暮らすことを選んだ「移民」であり、日本には帰還しない人々であると想定されてきた。しかし、親が永住目的で移住し、その移住先で育つ第二世代であっても、祖国(出身地)と密に関与しながら生活を送っている者もあり、誰もが単純に同化・現地化するわけではない (Levitt and Waters 2002)。近年の欧米の移民研究では、第二世代がトランスナショナルな関係性に埋め込まれた生活を送るなかで、祖国への憧憬・ノスタルジーや強い愛着・帰属感覚を抱くようになり、それが原動力となって祖国に帰還する現象が取り上げられて

いる (Wessendorf 2013; Bolognani 2014; King and Cristou 2014 など) <sup>(3)</sup>。これら第二世代の帰還移住に関する研究を踏まえると、移住先に長期滞在・永住する日本人の第二世代であっても、現地社会に一方的に同化するのではなく、日本に帰還しようとする可能性は否めない。

当然ながら、親世代の海外移住が自発的であり、具体的な帰国の予定のない長期滞在・永住日本人移住者第二世代の場合、帰還は約束されたものではない。かれらにとって「日本に帰還すること」は、育った場所を離れ、一度も、あるいはほとんど住んだことのない場所にあえて「移住」することを意味する。この点において、日本に帰還するということは、第二世代の自己のライフコース選択のひとつであり、「人生に痕跡を残すような重要な移動」(ハージ 2007) の実践である。しかしながら、かれらの移住は自発的かつ個人的であるがゆえに、移住過程において困難に直面した場合、「個人の問題」として等閑視される可能性があり、駐在家庭のように問題化されにくい。したがって、教育制度を利用し帰国生として日本に帰還するという従来のオーソドックスな接続パターンだけでなく、「多様な日本への帰還のかたち」が存在していることを想定し、決してエリート層ではない第二世代が日本へ帰還する過程において直面する問題を検討することは重要な課題である。

では、帰還移住過程において直面する問題を検討する際、どのような点に着目すればよいのか。本稿では、「受け入れの文脈」(Portes and Rumbaut 2014) という概念枠組みを参考にし、帰還移住過程において第二世代が経験する構造的制約について検討したい。Portes と Rumbaut (2014: 39) は、移民が移住先にどのように接続されるのかを明らかにするために、「労働市場」、「エスニック・コミュニティ」、「移

民に関する政策」という三つの受け入れの文脈に着目している。しばしば「編入様式論」と呼ばれるこの理論は、移民第一世代が出身国からアメリカに定住していくことを前提に構築されたものであり（南川 1999）、移住先（アメリカ）の文脈にのみ焦点が当たっている。しかし、移民の第二世代が出身国と移住先の双方の社会を同時に生きるトランスナショナルな状況にあることを踏まえると（Levitt and Waters 2002）、かれらはホスト社会と出身国の両方の構造的・制度的文脈に関与していると考えられる（関 2013: 387）。

以上より、本稿では Portes と Rumbaut の理論枠組をトランスナショナルな視点から捉え直し、グアムから日本へ帰還移住を試みる日本人青年が経験する構造的制約について日本とグアムの双方の「受け入れの文脈」に着目しながら考察を加える。この試みは、本稿の目的である海外・帰国子女研究への貢献だけでなく、移民研究における理論的発展にも寄与するものでもあると考えられる。

## 2 帰還移住するグアムの第二世代

本研究は、筆者が実施してきた長期滞在・永住する日本人家族に関するグアムでのフィールド調査に基づくものである。グアムを調査地とした理由は次の二つである。第一に、後述するように、グアムは本研究の対象のような長期滞在・永住者の数が 1990 年代後半から急激に増加しており、駐在者の数を上回っていることから、長期滞在・永住者を対象とする本研究に適している。第二に、日本から近く（飛行機で 3 時間半程度）、島嶼部でもあるため、移住者が日本との越境的な関係を築きやすく、それを観察しやすいことも、調査地を選定する上で非常に重要な要素である。

グアムは人口約 16 万人の太平洋に浮かぶ島である。アメリカの準州（非編入領土）として位置づけられており、米国市民権は付与されるが国政などへの参加は制限されている。近年のグアムの特徴として、社会全体が多文化化していることがあげられる。先住民族のチャモロ系が 4 割弱、フィリピン系が 3 割弱、ミクロネシア連邦や周辺島嶼部系が約 1 割となっており、残り 2 割強が白人系、黒人系、ヒスパニック系、アジア系（フィリピン系を除く）などで占められている（Guam Bureau of Statistics and Plans 2014）。日本人を見ると、2015（平成 27）年時点で 4,591 人がグアムに居住しており、「長期滞在者」が 1,761 人、「永住者」が 2,830 人となっている（外務省「海外在留邦人数調査統計」）。現地の実態に合わせ、前者を駐在家庭、後者を長期滞在・永住家庭および国際結婚家庭と想定すると、グアムの日本人の約 6 割が駐在員以外の人々で占められていることになる。

本稿の対象である長期滞在・永住する日本人は、グアム社会における人種構造のなかで「ミドルクラス」に位置づいている。かれらが現地社会で比較的高い社会的・経済的地位が与えられている理由は、グアムの経済的基盤が非常に脆弱でありフィリピンや周辺島嶼部の移民を中心とした貧困層が多いことや、全島総生産の約 7 割を占める観光業および関連産業の主な担い手と消費者が日本人であること（山口 2010）などが影響している。しかし、多くが日系企業の現地採用者か小規模の自営業を営む長期滞在・永住者は、日本の政府や企業から庇護を受けておらず、日本人コミュニティ内では駐在員よりも社会経済的に低い位置にいる。特に現地採用者の場合、同じ日系企業に勤める駐在員との給与や待遇に大きな格差があると言われているが（松谷 2014）、グアムの場合も同じであり、生活に余裕があるわけではない。駐在員を「アッ

パー・ミドルクラス」とすれば、長期滞在・永住者は「ローワー・ミドルクラス」という位置づけになる。

グアムでは、ミドルクラスに位置づく者がキャリア形成のために島外へ移動することは珍しくなく、日本人についても例外ではない。「日本への帰還」という現象も、こうした文脈において生じている。日本人移住者第二世代の場合、青年期に「何もない島を出て日本に帰る」という進路を選択するライフコースがひとつのモデルケースとなっている。このような、将来的な帰還移住の選択は、家庭生活、学校生活、学校外での生活（同質的なエスニック集団内での交友関係など）などといった、幼少期から青年期にかけての生活経験に大きな影響を受けている（Wessendorf 2013）。

第二世代の多くは、日本人コミュニティと深く関与しながら育ち（習い事や在外教育施設など）、メディアなどを通じて日常的に日本と出会い、さらに頻繁に日本に旅行や「里帰り」をしており、将来的な日本への移動をイメージしやすい環境にある。また、かれらはグアム社会と深く関わりながら生活するなかで、島の経済的基盤が脆弱であることや、進学先や職業選択のバラエティが少ないこと、さらに観光地特有の牧歌的あるいはリゾート的な雰囲気などを通じて、グアム社会の「狭さ」や「物足りなさ」を経験するようになり、グアムからの移動を望むようになる。その一方で、自分の祖国・ルーツである日本に憧憬の念や愛着を抱き、日本への帰還を望むようになっていく（芝野 2016）。他方で、こうした進路選択は、親の教育戦略とも密接に関連している。実際に、将来我が子にグアムに住み続けて欲しいと望んでいる親世代（第一世代）は極めて少ない（芝野・敷田 2014）。

このような生活経験を有する第二世代は、グアムに同化・現地化することなく、一度も、あ

るいは短期間しか居住経験のない日本に帰還しようとする<sup>(4)</sup>。無論、かれらの帰還移住は、駐在員のように企業によって計画されたものではない。また、南米系のニューカマーや中国帰国者のような経済的あるいは政治的背景による帰還でもない。それは、自発的かつ個人的な動機に裏打ちされたものであり、広い意味でのライフスタイル追求を目的とした帰還であると言い換えることができる（Bolognani 2014）。

グアムの第二世代の帰還移住は、大抵の場合、高校卒業時に「日本の大学に進学する」という形で成し遂げられる（芝野 2016）。日本にスムーズに帰還するために、帰国生入試を利用して「大学生」として移動するのである。帰国生入試という教育制度は、第二世代にとってルーツ（日本）に帰るためのルートとなっていると言える（芝野 2016: 116）<sup>(5)</sup>。一方で、日本の教育制度を巧みに利用して移住しようとする第二世代だけではなく、「就労者」として日本に帰還しようとしたがスムーズにいかず、グアムに残って／戻って就労しながら生活を送る若者も存在している。本稿では、このタイプの第二世代の帰還移住をめぐる経験を描き出す。具体的には、かれらがどのような過程を経てグアムに残った／戻ったのかを、「受け入れの文脈」に着目しながら考察する。

### 3 帰還移住をめぐる経験

本稿では、グアムでのフィールド調査において出会った日本人青年3名を取り上げる<sup>(6)</sup>。この3名を取り上げる理由は、筆者が継続的に関わりをもっており、比較的長いスパンでかれらの帰還移住の「過程」を分析することができるからである。本事例の記述の軸となっているのは、2013年から2016年にかけてグアムと日本で実施したフィールドワークおよびイン

表 1: 対象者の情報

	ツヨシさん	ジョウさん	カズさん
年齢 (2013年時点)	30歳	28歳	28歳
出生地	日本	日本	日本
グアム移住時期	3歳	1歳	1歳
国籍・在留資格 (2013年時点)	日本・永住権	日本・永住権	日本・永住権
教育歴	高校中退	高校中退	大卒(米国)
職業 (2013年時点)	グアム就労	グアム就労	グアム就労
学校卒業・中退以降の進路 (2013年時点)	グアム就労	グアム就労→日本就労→グアム就労	日本就労→グアム就労
最初の聞き取り後の動向 (2013年以降)	・日本で2度就職活動(2016年11月18日時点)	・日本に再び渡航(2015年3月) ・その後定住し、永住権を破棄(2016年6月4日時点)	—

タビューのデータである。この聞き取りと参与観察のコラボレーションは「エスノグラフィック・インタビュー」と呼ばれており、社会構造と個々の主体との相互作用の結果として生起する人々の社会生活を、フィールドの文脈に寄り添いながら理解・記述するための方法である(O'Reilly 2012)。本調査はこの方法論に依拠して実施している。

聞き取りは、半構造化形式で2時間から2時間半の範囲で行われた。また、これらのインタビューを解釈・記述するために、かれらの職場や家への訪問、「飲み会」やイベントなど誘われるものには全て参加し、グアムでの日常生活の文脈に出来る限り近づくことを心がけた。最初のインタビューの後も継続的に連絡を取り合っており、SNS等でお互いの近況報告をすることや、グアムや日本で会うこともある(2016年11月時点)。こうした関わりのなかで得られた情報も分析に加えている。

対象者の情報をまとめると、表1のようになる。全員が長期滞在・永住する日本人の両親を

もち、日本で出生後、1990年代初頭ごろに家族とともにグアムに移住した。両親は、全員が日系企業の現地採用者としてグアムで就労している。聞き取り当時(2013年)、3名ともに日本国籍を保持しつつ、米国永住権を取得していた。教育歴は、2名がグアムの高校中退、1名が大卒(米国)となっている。また、最初の聞き取り時(2013年)、全員がグアムの観光関連の仕事に就いていた。

以上を踏まえ、本節では、3名の帰還移住をめぐる経験を記述する<sup>(7)</sup>。なお、それぞれの移住経験は、「帰還移住を決意するまで→帰還移住の過程→帰還移住を試みた後」の流れに沿って記述している。

### 3-1 ツヨシさんの物語

ツヨシさんは、3歳のとき家族とともにグアムに移住した。移住の理由は、父親が「グアムでシェフとサーフィンをやるため」だったという。移住してからは、一度も他の場所で生活したことがなく、28年間グアムに住み続けて

いる。

ツヨシさんは、日本で生活していたときのことをほとんど覚えていない。幼少期から青年期にかけての思い出は、すべてグアムでつくられたものである。かれは一時期、日本人移住者などアジア系が多く通う私立学校を転校し、チャモロ系やフィリピン系の多い現地の公立学校に通っていた。その時に遭ったいじめの経験は、かれの「グアム」に対するイメージをネガティブなものにした。現地校での差別の経験は、やがてグアム社会に対する反発へと変わっていった。その感情は、今もなお消えることがないという。そんなかれにとって、日本人補習授業校（以降、補習校と記す）が現地校で負った「心の傷」を癒す唯一の場所であった。このような学校生活を送るなかで、かれは日本に強烈な憧れを抱き、「日本人であること」に執着するようになる。「顔も心も日本人」であるにもかかわらず日本語が話せず読み書きもできない日本人になってしまうことを危惧し、訛りのない日本語と「正しい」読み書き能力を補習校の授業や日本のテレビを通じて必死に身につけた。

このような思春期を過ごしたツヨシさんは、高校卒業後、「うざったい」グアムを脱出し、日本の大学に進む予定であった。しかし、最終的に現地の高校を中退し、グアムに残るという決断をする。思春期で多感な時期であったかれにとって、恋愛やラジオ DJの方が、「日本の大学に行く」という夢よりも魅力的だったのだ。高校を中退し、大学に進まなかったツヨシさんは、自分の「故郷」である日本に住むという夢を後回しにし、グアムに残って生活することを決めた。しかし、今となっては、「勢いだけで」グアムに残ったことを少し後悔しているという。高校を中退した過去を振り返りながら、DJになる夢が朽ち果て、その後転職を10回以上繰り返して、現在は旅行会社で「下っ端」とし

て働いていることを淡々と話してくれた。

一般的にグアムの日系企業の現地採用者は、駐在員よりも賃金が低く、雇用形態も「時給」であることが多い。「キャリア組」にはそう簡単にはなれない。帰国生入試で日本の一流大学に進学し、エリートとして世界中を駆け回るかつての仲間と比較しながら、英語も話せずグアムのことも何も知らない日本からの出向者にいつまでも「扱き使われる」自分の現在を憂える。ツヨシさんは、そのような希望のもてないグアムでの生活から脱出し、憧れの日本で働きたいという思いをもち続け、何回も日本への移住に挑戦しようとした。しかし、下記の語りにあるように、学歴資格の有無が職の獲得を左右する労働市場の選抜システムの存在が、中卒であるかれの夢を幾度となく打ち砕いた。

【日本で働こうとか思ったことないんですか？】会社辞めるたびに日本でやってみたいと思ったよ。自分に自信がついてから行こう行こうと思って。でも、実際仕事ないよな。英語できます、日本語もできます、でもグアムの高校中退ですじゃあ、誰も雇ってくれないよ、そんな甘くないよ。で、結局ずっと行けないまま、ずるずるグアムにいる。（インタビュー／2013年8月27日）

結局、日本へ移住するという夢を一旦諦め、その夢をひとまず10歳年の離れた二番目の弟に託すことにした。「日本に住んで日本人になりたいきゃ、帰国子女になって大学行け」というかれの「教訓」を忠実に守ったコウキさんは、現地の高校をトップクラスの成績で卒業した後、帰国生入試を利用して日本の有名大学に進学した。

そんなツヨシさんは、インタビューの途中、

自分に「日本人の血」が流れていることを忘れないために、二つのタトゥーを体に刻み込んだことを教えてくれた。右肩には大きな「日の丸」が彫られ、右脛には綺麗にうねる昇り龍が描かれていた。「自分には日本人の血が入っている、世界一の血が入っているっていう、そういう自分の美しい部分を忘れたくない」と語っていた。幼少期からグアムをどうしても好きになれない自分と、かといって結局日本に行くことができずにいる自分。グアムと日本のどちらにも帰属することができずにいるツヨシさんは、身体に自らの「ルーツ=日本」を刻み込むことで帰属感覚を獲得しようとした。まさに、かれの右肩と右脛は、帰属をめぐる「政治的領域」(Back 2007=2014)となっていたのだ。

こうして日本への移住を一度は断念せざるを得なかったツヨシさんだが、日本に帰還する夢を完全に捨て切れてはいなかった。かれは2013年のインタビュー後、現在(2016年11月時点)までに2度日本への帰還移住を試みている。個人的な知り合いの「ツテ」やインターネットの情報などを手掛かりに、なんとか日本で就職できるよう、職探しに励んだのだという。しかし、結局2回とも、永住権を破棄して日本に定住できるような長期的展望をもてる安定した職を見つけることはできず、グアムで生活することとなっている。

現在、ツヨシさんは、アメリカ国籍を取得するか迷っているという。アメリカ国籍を取得しておくほうが、グアムで生活する上で何かと便利であるというのが理由である。しかし、日本の現行の法律では、外国の国籍を取得した時点で、日本国籍は破棄されるため、日本で職を見つけたり居住したりすることが制度上難しくなることも想定される。かれは今もなお、アメリカ国籍を取得するか、日本国籍を保持したまま永住者としてグアムと日本を行き来する生活を

送るか迷いながら生活している。

### 3-2 ジョウさんの物語

ジョウさんは、ツヨシさんの弟であり、グアムに移住してきたときは1歳であった。かれは兄と同じく、平日は現地校に通い土曜日は補習校で学ぶという生活を送っていた。

ジョウさんはツヨシさんと同じように、高校を中退している。その理由は、「夜の世界にのめりこんでしまった」からだという。かれが夜の世界に魅せられ、ナイトクラブやバーで働くことを夢見るようになったきっかけのひとつに、16歳の時に日本に渡航したときの経験があるという。ジョウさんは、高校に入りたてのころ、グアムで仲の良かった日本人の先輩をつたい、日本の大学を見学しに行った。将来、自分も帰国生入試を使って大学に進学しようと考えていたからであった。しかし、その短期訪問で、かれは自分にとって信じ難い光景を目にした。日本でトップレベルとされている大学で見た英語の授業レベルの低さ、学生のやる気のない雰囲気、そして帰国生入試で「楽して」大学に入り、遊びほうけている学生が簡単に一流企業に就職していくという事実。思春期のジョウさんには、理想郷としての日本の大学や日本社会は、極めてネガティブなものとして映ったのである。このような経験から、かれはそれまで抱いていた「日本の大学に進学して日本に住む」というモデル・ストーリーを書き換えなければならず、路頭に迷うこととなった。

結局、親の猛烈な反対を押し切り、兄と同じように高校中退し、観光地で働くことにした。かれはグアムの「夜の世界」で一心不乱に働いた。その努力が報われ、20代前半にして、あるナイトクラブの店長を任されることになる。大出世であった。しかし、グアムの「夜の世界」で成功を収め順風満帆な生活を送っていたジョ

ウさんは、その絶頂とも言える時期（23歳）に突然仕事を辞め、日本に移住することを決意する。その理由を以下のように話している。

クラブの店長をやって、グアムのレベルが低くなって。自分はそれ以上成長するのかなみたいな所があって。そういうのに嫌気が差して。で、鍛え直す為に、このグアムの甘ったれた感じから抜け出すためにも、ちょっと1回自分を追い込んでみようかなって言う。(…)あと、ずっとこっちで育って、日本への憧れっていうのがあった。とりあえず、ちょっと住んでみたいっていうのがあって。自分は日本人なのに、日本のこと何も知らないなって。何だろう、自分を試したいっていうのもあったし。いろんな感情とか、日本への憧れとか、思いが重なって。ちょうどその時に。  
(インタビュー／2013年8月29日)

かれは、「レベルが低い」小さな島で一喜一憂している自分に嫌気がさしていた。また、狭いグアムのネットワークに埋もれてしまうことにも強い危機感をもっていた。このように「甘ったれたグアム」で「フラフラ」している自分を鍛え直すため、ジョウさんは日本に行くことを決心したという。

上記の語りにおいて興味深いのが、日本への移住を試みる理由に、「自分のルーツを確認する」という、もう一つのテーマが存在していたことである。その背景に、学校経験の影響を見ることができる。ジョウさんは、兄のツヨシさんと同じく、日本人が多い私立学校からチャモロ系の生徒が多い田舎の公立学校に転校したことがある。その時に、戦時中日本がグアムを占領していた時期に日本兵から迫害された記憶を受け継ぐ先住民（チャモロ系）の子孫から容赦

ない罵声を浴びせられ喧嘩をふっかけられた。自分はグアムで育ち、グアムに愛着があり、ほとんど日本に住んだこともなく、日本の歴史のことも知らない。しかし、他者からは容赦なく「日本人」としてまなざされ、しばしば攻撃の対象となる。かれは、こうした自分の立場性に違和感を抱き続けてきたという。ジョウさんの帰還移住は、揺らぎ続けてきた帰属の感覚を少しでも安定させるための移動実践でもあったのだ。

思い立ってからすぐ、バックパックひとつとわずか1000ドルの現金だけをもって単独で日本へ飛び立った。身を寄せることができる親族が日本にいなかったため、グアムで働いていた時に知り合った友人をつたい、宿を確保した。その後、友人のツテで鳶職の仕事を見つけた。しかし、寝泊りしている友人の家から職場までの電車代が払えなくなり、2ヶ月後に仕事を辞めざるを得なくなった。時を同じくして、友人と喧嘩別れをしてしまい、家から追い出されてしまった。所持金も底を尽き、ついに「宿無し一文無し」になってしまった。知り合いのいないジョウさんは、真冬の寒空の下、野宿生活を送ることになった。「1日1駅歩いて、夜になると駅で寝て」という日々を送った。

5日が過ぎたころ、ようやく一筋の光が差し込んだ。「良い仕事があるからついてきな」と男に声をかけられたのだ。男についていくとそこはキャバクラであった。早速その日に「ボーイ」として雇用され、一生懸命働いた。自分が経験したかった「日本の夜の世界」で働けること、そして何より、暖かい寝床と最低限の給料が用意されていることが嬉しかったという。しかし、その仕事も3ヶ月ほどで辞めてしまった。倒れるほど働かされたにもかかわらず、支給されるはずの給料の5分の1にも満たない金額しか支払われなかったからである。かれは



支払われた僅かな給料を手に寮を飛び出し、インターネットカフェを転々としながら仕事を探す生活を送った。その後、なんとか首都圏のナイトクラブで職を見つけることができた。日本有数の歓楽街で働けることの喜びを噛みしめながら、このチャンスは逃すまいと、無心で働いた。気がつくと、来日してから10ヶ月が経過していた。

かれは、永住権を保持するために仕事を辞めてグアムに帰るか、それとも永住権を放棄し日本で働き続けるかの二択を迫られた。通常、1年の間にアメリカ（グアム）に居住した形跡が確認できない場合、アメリカ政府に永住権を剥奪されてしまう。デッドラインを越えていてもおかしくない状況であった。ちょうどその時、勤めていたナイトクラブで正規雇用されることが決まりかけていたことは、かれの決断をさらに難しいものにした。悩みに悩んだあげく、日本で安定した生活ができる保障がないこともあり、「家族もいるし、今はグリーンカード（永住権）の方が大事だなんて思って」グアムに戻ることに決めた。しかし、永住権を放棄する自信がもてなかったこと、そのために憧れの「日本の夜の世界」で成功するチャンスを手放してしまったことに大きな未練を残していた。

グアムに戻ってきてからすぐ、年の離れた弟（先述のツヨシさんの弟でもある）が日本の大学進学を決めた。その弟の進学先は、ジョウさんが16歳のときに見学に行った大学だった。このことを聞いた後、筆者は以下のような質問を投げかけた。

【大学さえプラッと出ておけば、何の不自由もない、ある程度生活ができるっていう、そういう日本に、今、弟さんが行ってる事に対しては、どう…】嬉しい。正直、嬉しい。なぜなら、自分の見てきた先輩

達が、今いい暮らしをしてるから。自分とか、兄貴みたいに苦しい思いはして欲しくないし。弟がその道を選んだのなら、それは嬉しい。その、先輩達が悪いとかって言ってる訳でもないし、そういう生き方もある。自分みたいな人もいるし。ただ、どっちの方が将来有利かと言ったら、かれら（大学で日本に行った人たち）だよ。ね。（自分が）かれらの所まで行くとか、かれらを追い抜くためには、自分で何かを、企業起こすとか、それで成功するしかない。【将来的には、そういう事を考えてる？】自分の店、もてればいいけど。

（インタビュー／2013年8月29日）

ジョウさんは、筆者の意地悪で無神経な質問に対し、率直な気持ちを丁寧に伝えてくれた。このインタビューから1年後、かれはなんと、2度目の渡日を試みたのだった。日本で働いていたときの知り合いが、ナイトクラブのバーテンダーの仕事を見つけてくれたのだという。かれは日本に再帰還して1年以上経った今も、日本で働き続けている。すなわち、永住権を破棄し、日本に住み続けることを決心したのである。

筆者は、ジョウさんの職場に足を運んだ（2015年6月5日、2016年6月4日）。深夜にもかかわらず無数の人でごった返す、きらびやかな歓楽街の一画に、かれの働くナイトクラブはあった。満員のダンスホールでトランシーバーを携え、忙しなく働いていた。次から次へと来店する客に気さくに話しかけ、手際良くお酒をつくり、オーダーに応える。さらに、店内に点在する店員に細やかな指示を出し、ダンスホールを円滑に「まわす」。かれは、明らかに生き生きとしていた。工作中、筆者に、自分がこの1年で念願の正規雇用を勝ち取るこ

とができ、さらにダンスホールのバー・マネージャーにまで昇格したことを誇らしげに報告してくれた（2016年6月4日）。「俺のグアムでのキャリアからしたら当たり前なんだけどね」という言葉も忘れなかった。しかし、だからといって生活基盤の不安定さが解消されたわけではないことも話してくれた。依然、経済的に非常に厳しい生活を送っており、「グアムのほうが給料も待遇も全然いい」という。「グアムで育っても、帰国子女じゃなくても、これだけできるんだぜってことを見せたい」と強い口調で語るジョウさんは、今、憧れの大都会の夜を必死に生きている。

### 3-3 カズさんの物語

カズさんは、現地採用のシェフとして働く父の都合で1歳の時に来島し、4歳まで現地の幼稚園に通ったあと、日本に一時帰国し、小学校2年生まで日本で過ごした。その後、再びグアムに移動し、小学校3年生から高校卒業までの青年期をグアムで過ごした。

かれの青年期は、「苦悩」と「葛藤」の連続だった。それは、小学校3年生のときにグアムに戻ってきた直後から始まった。かれが入学当初に抱えた言語的なハンディキャップは、ときにいじめや教員の不理解を引き起こすことが多々あったという。このような「苦悩」と「葛藤」から一時的に解放させてくれたのは、毎週土曜日にある補習校だった。何も考えずに得意な日本語を話し、同じ「人種」である日本人の友だちと大好きなJ-POPや日本のマンガの話しをするのが最高に楽しかったのだという。

カズさんは、このようなグアムでの学校経験を振り返りつつ、グアムに住む年月が長くなるほど、この島に自分の居場所がないことに気づかされていったことを語っている。

俺的にはグアム、地元意識がない理由としてはまず自分がここに慣れてない。まず、自分、グアムに慣れてない。日本人だし、チャモロ人と仲よくしようと思っても、俺は多分、なかなか受け入れてもらえないっていう意識がまずある、自分のなかで。あるし、結局やっぱり俺なんかは英語も中途半端だったから、いまだにそうだから。そこまでこうなんて言うんだらう、スーパーローカルにはなれない。気分的にもなれないし、俺やっぱお前らとはちょっと違うよなっていう意識があるから、だから、余計、俺ここ地元だぜっていう感覚があんまないのかもしれない。浮いちゃってるもん。やっぱり。グアムの原住民、チャモロ人からしたら。原住民はチャモロ人だし。やっぱりチャモロこそがここ地元だぜって言えるんじゃないかなとは思う。なんとなくね。俺の感覚ね。

（インタビュー／2014年2月26日）

現地校でグアム生まれグアム育ちの「スーパーローカル」たちと出会い、かれらのことを知れば知るほど、自分がどれだけ努力しても獲得することができない微妙な言葉の使い方や立ち振る舞いから滲み出る「文化」に圧倒される。こうした経験の積み重ねが、かれとグアムを徐々に引き離していった。上記の語りにおける「俺ここ地元だぜっていう感覚があんまない。浮いちゃってるもん」という言葉は、それを如実に表している。

そんなカズさんは、大学進学を機にグアムを離れることを決心した。かつて自分が住んでいた懐かしの日本（＝地元）に帰り、自分の居場所を見つけたいという気持ちがあったからである。しかし、幼少期より苦しみながら努力して築き上げてきた英語力を失いたくないという思

いも強く、結局、日本の大学には進学しなかった。その代わりに、「日本人が多く日本人との絡みがある。かつ英語も忘れない場所」であるハワイの大学に進学した。しかし、大学卒業後、「やっぱり日本で仕事して、実際に日本に住みたいという気持ちは捨て切れなかった」ため、日本に住む親戚の家を間借りしながら就職活動を始めた。ここで、かれにとって大きな試練が待ち受けていた。

ハワイの大学に行っていて、結局日本で生活してみたいと思った時には既にその時点では遅かったんだよね。要はハワイでは日本でどういった内容で就活をしているのかって、そういう情報は全くもっていなかった、わからなかったから。結局最終的に（決断には）時間がかかったけど、最終的に日本に行ってみようということ、むこう（日本）で就活しようと、新卒だしと思っ行って見たけれど、就活の時期も全然知らなかったから、もう時既に遅しという感じで。

（インタビュー／2015年3月7日）

かれは日本特有の「就活文化」について何も知らず、「日本語もしゃべるんだし、英語もしゃべるんだし、どっかしら就職できるだろうと思ってた」という。ハワイの大学に通っていたため、日本での就職に向けたキャリア支援なども受けたことがなかった（そのような就職支援システムはなかった）。就職活動が在学中（大学3年生時）から始まることすら知らなかった。採用者に「ウケる」履歴書の書き方、写真の写り方、スーツの着こなし方、面接での話し方などもわからず、さらにそういった類のことを教えてくれる講習会や企業の説明会などが日本で開催されていることも知らなかった。し

ばらく書類審査（一次審査）さえ通過できない日々が続いた。インターネットの就職情報サイトで「履歴書は30社から50社出すのが当たり前」という記事を見たとき、気が遠くなった。最も辛かったのは、他の日本の大学生と違い、頼れる友人がおらず、一人で辛い就職活動を乗り切らなければならなかったことであった。結局、日本語と英語を使いこなせることをアピールできる場すら与えられなかった。

やがて、就職活動に対する「熱」が冷めていった。結局、正規の職を見つけることはできなかった。就職活動を諦めたカズさんは、バイトをしながら生計を立てることに決めた。米国永住権を取得していたカズさんは、日本で1年過ごした後、米国外での生活を追加で2年まで延長できる特別制度をたまたま知り、申請後に受理されていた。日本での生活も3年目が終わろうとした頃、永住権を放棄してこのまま職を探しながら日本に住むか、グアムに戻るかの決断を下さなければならなかった。「やっぱ悔しい思いはあった、まだ帰りたくない」と思っていたカズさんだったが、グアムにいる両親や面倒を見てくれていた親戚の説得もあり、仕方なくグアムに戻ることにした。

グアムに戻ったあと、父親の知り合いを通じて日系企業の旅行会社に就職が決まった。「グアムって、日本語がしゃべれる、英語がしゃべれる、で、こっちで働く資格がある（永住権をもっている）、この三拍子がそろっていればどこでも需要はある」と語るかれは、日本でもがき苦しんでいた日々が嘘のように、グアムでは何の苦労もなく簡単に就職が見つかったことを筆者に教えてくれた。加えて、「もちろん、（就職が）決まった時点で、俺のなかではモヤモヤして、本当に。これでよかったのかな、何してたんだろう、これで働くんだった、みたいなのがあった」という後悔の念も語られた。職を見つ

けることができた代わりに、自分のキャリア形成の道が断たれてしまったことを嘆いていた。

さらに、グアムに戻ってきたことを機に、自分の居場所を探すための長い「旅」にも一旦終止符を打つことにしたことも話してくれた。日本に帰還して「本当の日本人」と接すると萎縮してしまったことや、日本で仕事を見つけることが困難であった経験などを通じて、グアムで極端なまでに誇示していた自らの「日本人らしさ」を問い直すこととなったという。かれはひとまず、「日本育ちの日本人じゃないし、グアム生まれの日本人でもない。だけど、生まれは日本で育ちはこっち（グアム）だからグアム育ちの日本人」として、グアムで生きることを決意した。しかし、このことは決して日本に帰還するという願望を捨てたことを意味するわけではない。かれは現在も（2016年11月時点）、将来的に何らかの形でグアムを出ることを模索している。

## 4 帰還移住をめぐる排除と包摂

ここまで、3名の帰還移住をめぐる経験を見てきた。まず、3名が帰還移住を決断するに至る過程について確認しておきたい。かれらは、自らのルーツの確認やアイデンティティ・帰属意識の獲得、日本に対する憧憬や愛着、居場所の探求、将来の希望がもてないグアムから逃れるなどといった理由により、祖国である日本に帰還することを望んでいた。こうした意思決定の背景には、グアムでの幼少期から青年期にかけての生活経験が横たわっていた。とりわけ、現地校におけるいじめ・差別や補習校における「癒し」など、学校での経験が帰還移住の選択に重要な影響を与えていたことは重要である。

このように、かれらの帰還移住は、経済的・政治的な動機によるものでもなく、非自発的で

強制的なものでもない。2節で述べたように、それは極めて自発的なものであり（育った場所をあえて離れる）、ライフスタイル追求やライフコース選択の一環として捉えることができる（Bolognani 2014）。かれらにとって、「日本に帰還する」ことは、単なる国境を越える物理的な移動ではなく、帰属意識の獲得やアイデンティティ形成などと複雑に結びつく「人生に痕跡を残すような重要な移動」（ハージ 2007）なのである。

しかし、この重要な移動実践としての帰還移住は、極めて大きな困難を伴うものであった。次項では、日本とグアム双方の「受け入れの文脈」—労働市場、エスニック・コミュニティ、移民に関する政策—に着目し、かれらがグアムに残る／戻ることとなったプロセスについて考察を加える。

### 4-1 帰還移住過程における構造的制約

#### 4-1-1 労働市場

まず、3名に共通していたのは、高校卒業と同時に帰国生入試を利用して大学生として日本に行かず、学生時代を終えてから「就労者」として日本に参入していたことである。そこでかれらが経験したのは、学歴主義が根強く残る日本の労働市場からの「排除」である。中卒学歴であるジョウさんは、鳶職の日雇い労働やキャバクラのボーイなどを転々とする生活を送り、挙げ句の果てに野宿者になるという経験をしている。また、カズさんは、アメリカの大卒資格を有していたが、日本の独特な就活文化により、職を得ることなく日本を去ることになった。ツヨシさんは、そうした日本の労働市場の文脈を読み取り、高校中退の自分に長期的展望がもてるような職を得られる可能性はないと判断し、グアムに留まり続けていた。ちなみに、その一方で、ツヨシさんとジョウさんの弟

は、「帰国生」として日本の有名大学に進学している。

かれらは現地校と補習授業校で身につけた日本語と英語を流暢に操る。もちろん断言することはできないが、近年の日本の経済界が要請している「グローバル人材」と合致する部分も少なくはない。しかし、かれらが自分の能力を活かして社会経済的地位を築けるような労働市場に参入することは難しい。依然ドメスティックな学歴が確固たる威信を保っている日本では、たとえばアメリカで大学を出た第二世代であっても、「日本では知られていない大学を卒業した労働者」として迎えられるため、学歴に見合った仕事を見つけることが厳しくなる。非大卒者となると、それ以上に職を見つけることが困難になる。見つかったとしても、ジョウさんのように低賃金ブルーカラーかアンダークラスの劣悪な労働世界を経験することになる。グアムから日本に（再）移住しようとする日本人移住者第二世代は、「帰国生」として好意的に日本に受け入れられるタイミングを逃すと、「海外からの就労者」と同じような扱いになってしまうのである。

一方で、同時にかれらがグアムの労働市場に「引っ張られている」ことも、グアムに戻った、あるいは残った要因である。3名とも、少なからずグアムでは仕事を見つけることができ、それなりに生きていけるという見通しをもっていた。実際に、グアムでは日本人向けの観光関連産業が発達しており、日本人労働者の需要は高い。また、労働市場における競争相手の社会経済的地位の低さから（フィリピン系移民やミクロネシア連邦など島嶼部からの移民など）、日本語と英語のいずれも話せる日本人であればグアムでそれなりに生活できる職業に就くことができる。こうして二つの労働市場の間に生きるかれらは、日本の労働市場から「排除」される

と同時に、グアムの労働市場に「包摂」され、観光地で日系企業の現地採用者の職を得ていくのである。

#### 4-1-2 エスニック・コミュニティ

次に、エスニック・コミュニティの有無も日本にスムーズに帰還できるかどうかを左右していた。移住システム論では、人の移住パターンとして、親族ネットワークをつたって連鎖的に移住する「相互扶助型移住システム」と、日系ブラジル人のように自動車産業をはじめとする特定の企業組織やマーケットとの強固なつながりによる「市場媒介型移住システム」の二つがあるとされている（梶田・丹野・樋口 2005）。しかし、本研究の対象者は、そのいずれにも当てはまらないかたちで移住を試みていた。かれらには、同国・地域出身者で構成される組織やコミュニティなどの「国境を超えるネットワーク」が存在しておらず、さらに親世代のほとんどが核家族であり「個人化された移住経路」（南川 2005）を辿って移住しているため、日本国内では個人的な友人関係やほとんど会ったことのない数少ない親族など断片化されたネットワークに頼るほかない。したがって、自らの「人生に痕跡を残すような重要な移動」（ハージ 2007）を、ほぼ単独で行わなければならないのだ。つまり、かれらは極めて個人化された帰還を余儀なくされていたと言える。無論、日本の学生ように、大学などの教育機関による手厚い就職支援を受けながら職を見つけるということはない。

このように、仕事を見つけることを含め、日本で直面する諸々の困難を個人で対処しなければならない。例えばカズさんは、ネットワークの量と社会関係資本の蓄積がものを言う日本の就活文化についていけず、基本的な情報を得ることすら困難な状況に陥り、結局ひとつの内定も獲得することができなかった。自分の最大

の特長である「バイリンガル」を披露することもできなかったのである。ツヨシさんも、個人的な「ツテ」やインターネットの情報のみで国境を越える就職活動を行わなければならない、結局、日本に定住できるような安定した職を見つけることはできなかった。一方ジョウさんは、日本で構築した個人的なつながりが功を奏し、グアムに戻ってきた後に日本への再移住を試みることができた。しかし、そうした移住のチャンスは極めて偶発的であり、さらに日本に移住した後も長期的展望がもてるような安定した職に就くことは非常に困難である。

結局、日本とのつながりが希薄であるかれらは、グアムにいる家族や日本人コミュニティのほうに包摂されていく。グアムにある豊富な社会関係資本を元手に日系企業の現地採用者として就職し、家族とともに生計を立てるという道を選ぶことになるのだ。しかし、日本への帰還を望むかれらにとって、グアムにおけるエスニック・コミュニティに包摂されるということは、それらの「つながり」に引っ張られ、封じ込められていく過程であることを意味している。

#### 4-1-3 移民に関する政策

労働市場やエスニック・コミュニティだけではなく、日本とグアム（アメリカ）の移民をめぐる政策も、かれらを日本からグアムへ水路づける要因となっていた。まず注目したいのが、3名のグアムでの法的な立場である。全員が日本で出生し、幼い頃にグアムに移住しており、アメリカ国籍をもっていない。一方で、全員が米国永住権を所有しており、市民権はもっていないが永住権を保持する「デニズン」(Hammar 1990)としてグアムに居住している。すなわち、「帰化せずホスト社会から見れば外国市民でありながら、居住に関しての権利は市民と変わらない人々」(水上 1995: 138)であり、就業の法的な権利などを付与されている。かれらの

「日本生まれ、日本国籍、永住権保持者」という立場は、グアムから日本への帰還移住に大きな影響を与えていた。

3名は、永住権を保持しながら日本への移住を試みようとしていた。日本への移住が成功しなかった場合、グアムに戻って就労しなければならないため、永住権をキープしておかなければならないからである。日本で安定した職に就ける見通しが立ちにくいかれらにとって、永住権は移動する際の「保険」なのである。しかし、この保険としての永住権は、一方でかれらの日本への帰還を困難にしていた。なぜなら、米国永住権の場合、1年のうちの一定期間を米国圏内で過ごさなければ剥奪されるため、日本に長期間滞在することが難しいからである。ジョウさんやカズさんは、この永住権の制約によって、最終的にグアムに戻ることを決意していた。日本への移住を模索する際、かれらは常に永住権を破棄するかどうかの瀬戸際に立たされるのである。また、一度も移住を試みたことのなかったツヨシさんも、最初のインタビューの後に日本で2度就職活動を行ったが、永住権の破棄を決断できず、今のところグアムで生活することを選択している。

ならばアメリカ国籍を取得して移動の自由を手に入れるという方法もあるのではないかとと思われる。しかし、重国籍者の存在を認めていない日本の現行の法制度では、アメリカ国籍を取得した時点で日本国籍を喪失することになる。そうすると、それ以降は日本に「外国人」として編入しなければならなくなり、日本に帰還できる見通しが余計に立ちにくくなる可能性がある。ツヨシさんやカズさんは、こうした状況から、アメリカ国籍を取得することを一旦保留している。水上(1995)は、帰国の意志はあるが祖国に戻る具体的な予定が立っていない者を「永住型ソジョナー」と呼んでいるが、かれら

はそうした立場を選択し、グアムに戻って日本への帰還のチャンスをうかがうこととなっていた。このように日本人移住者第二世代は、日本とグアム（アメリカ）双方の移民の処遇をめぐる制度の間で揺れ動かされていたのである。

#### 4-2 継続する帰還移住

ここまで、本事例の3名が、どのようにグアムに残る／戻ることとなったのかという問いを明らかにすることを通じて、第二世代が帰還移住する際に直面する問題について考察してきた。かれらは、労働市場、エスニック・コミュニティ、移民に関する政策といった日本とグアムの双方における構造的・制度的文脈のなかで、日本から排除されると同時にグアムに包摂されるという経験をしていた。

ここで留意しておきたいのが、「グアムに包摂される」ということは、なかば必然的にグアムの日本人コミュニティにおける「下層」に位置づけられることを意味していることである。事実、2節で述べたように、日系企業の現地採用者と駐在員との間には、給与などの待遇や昇進などの身分に極めて大きな格差があり（松谷2014）、グアムも例外ではない。グアムで就労する第二世代は、このような格差状況に必然的に埋め込まれていくのである。こうして、かれらは日本人コミュニティに存在する格差を生きるなかで、「どこにも行き場のない」感情を抱くようになっていく。ツヨシさんやジョウさんのインタビューでも、階層化されたグアムの日本人コミュニティに対するやり場のない怒りが語られた。

一方で、こうした感情は、日本へ再び移住しようとする物理的移動の原動力となっていた。前節で見たように、3名全員が日本へ移住するチャンスをうかがっていた。ツヨシさんとカズさんも、「グアムを出て日本に帰る」という移

住計画に一旦終止符を打ちつつも、いずれは帰還のチャンスを見つけたいと語っていた。実際に、ツヨシさんはインタビュー後に2度日本で「就活」を試みていた。また、ジョウさんに至っては、日本において壮絶な経験をしたにもかかわらず、再び日本への移住を企て、永住権を破棄し、グアムで働くよりも不安定な条件で働き続け、正規雇用を勝ち取るまでになっている。

さらに、帰還移住の経験は、自らのアイデンティティや帰属意識を（再）創造する契機にもなっていた。カズさんは帰還移住を通じて「グアム生まれの日本人」というナショナルな枠組みに縛られない新たな帰属感覚を獲得し、ツヨシさんは帰属感覚をタトゥーとして身体に刻み込むことで自らのルーツを表現するようになった。そしてジョウさんは、日本で働き続けるなかで、グアムで育ってきたことを誇りに思うようになっていたのだった。

このように、帰還移住は一過性のものではなく、継続するプロセスであると言える。本事例の3名は、「物理的な移動が終了した後も継続的に更新される主観的解釈のプロセスとしての移動」（関2013: 387）と向き合いながら、それぞれの道を歩んでいた。このことは、かれらが決して構造的制約の前に無力な存在ではないということを示している。

## 5 おわりに

本稿では、グアムの日本人青年を事例に、海外に長期滞在・永住する日本人移住者第二世代の帰還移住をめぐる問題を、構造的制約としての「受け入れの文脈」に着目して考察した。最後に、本事例が当該研究領域に与える示唆と課題を二点述べたい。

第一に、これまで、特定の階層的背景や移動形態をもつ駐在家庭の第二世代に焦点化してき

た海外・帰国子女研究では、本事例で見たような日本への帰還をめぐるリアリティは明らかにされてこなかった。海外に居住し帰還する日本人は常に「エリート」や「特権層」として表象され、手厚い日本への受け入れ制度が確立されてきた経緯がある (Goodman 1990=1992)。「グローバル・エリート」としての「帰国生」は、教育機関・制度を通じて比較的スムーズに日本に接続され、好意的に受け入れられていく。しかし一方で、本稿で見たように、親が自発的に海外移住した長期滞在・永住者の第二世代が、「就労者」という立場で海外から日本に帰還する場合、たとえ日本で生まれ日本国籍をもっていたとしても排除の対象に転じてしまう。日本にスムーズに接続させるために設けられた帰国生入試という教育制度を利用して「帰国生」として帰還しない場合、日本への移住は極めて困難になる。同じ祖国への帰還移住であっても、日本に接続される際の立場や文脈が異なれば、帰還の経験は大きく異なるのである (Tsuda 2009)。こうした事例から示唆されるのが、「特権層」(Goodman 1990=1992)として表象されてきた「グローバル・エリート」としての帰国生ではない、「グローバル・ノンエリート」と呼べる第二世代が存在しているということである。国際移動する日本人のグローバルな資質が称揚される裏側で、「グローバル・ノンエリート」が複数の場所を彷徨い生きているという現実を議論の俎上に載せることが、今後の課題となるだろう。

第二に、本事例で見たように、第二世代の日本への帰還は自らのアイデンティティや帰属意識と密接に結びつく極めて重要な移動実践であった。特に、「祖国と受け入れ国どちらに対しても全面的な構成員とは認識できず、エスニック・アイデンティティ喪失の危機に直面」(水上 1995: 138) しやすい「永住型ソジョ

ナー」であるかれらにとって、日本への帰還は「人生に痕跡を残すような重要な移動」(ハージ 2007) である。このように考えると、第二世代の日本人の間に、自らのルーツへの帰還をめぐる希望をもてる者ともてない者が存在している状況が浮かび上がる。帰還移住が一過性のものでなく継続するプロセスであったことを踏まえれば、こうした第二世代の移住経験を単に物理的移動の問題とするのではなく、ライフコース選択の問題として捉えることが必要であろう。

本事例で見たような、日本への帰還移住をめぐる希望をもつことが困難な状況にある「グローバル・ノンエリート」の第二世代は、日本人の海外移住の多様化の帰結であると考えられる。海外に自発的に長期滞在・永住した親をもつ第二世代の帰還は、極めて自発的で個人的なものである。それは駐在員のような企業による計画的な帰還ではなく、南米系のニューカマーや中国帰国者のような経済的・政治的背景による帰還でもない。それゆえに、移住過程において直面する諸問題が「個人の問題」として等閑視される可能性がある。こうした課題の解決は、かれらの移住経験を居住地と出身地の双方の構造的・制度的文脈との関係において解釈した上で、複数の社会にまたがって生きる人々の「多様な日本への帰還のかたち」をつぶさに描き出すことで見えてくるはずである。

## 注

- (1) 本稿は、平成 28 年度に大阪大学大学院人間科学研究科に提出した博士論文の一部を加筆修正したものである。
- (2) 親の出身国で出生し子ども期に移住した第二世代を「1.5 世」、移住先で出生した第二世代を「二世」と分類する場合があるが、本稿では両方を含むカテゴリーとして「第二世代」という概念を用いる。また、海外・帰国子女教育の領域では、駐在員の子世代を



「在外子女・海外子女」や「帰国生・帰国子女」などと呼んでいるが、本稿では、海外に移住する日本人を「移民」として捉え、その子世代を第二世代と呼ぶことにする。

- <sup>(3)</sup> 第二世代の帰還移住は、様々な地域で報告されている。Wessendorf (2013) は、スイスのイタリア系移民第二世代が親世代の出身地域に帰還する現象を「ルーツ移住 (roots migration)」と呼び、そのプロセスを丹念なフィールドワークより描き出している。King と Christou (2014) は、ディアスポラ研究を発展させ、「逆ディアスポラの移住 (counter-diasporic migration)」という概念を用い、第二世代のギリシャ系アメリカ人・ドイツ人のギリシャへの帰還現象を分析している。Bolognani (2014) は、イギリスのパキスタン系移民を取り上げ、親世代や第二世代が自己のライフスタイル追求を動機として (lifestyle reasoning) 祖国パキスタンに帰還する様子を取り上げている。また、「第二世代」を扱ったものではないが、Tsuda (2009) が「民族的帰還移住 (ethnic return migration)」という枠組みを用い、日系ブラジル人の世代を越えた日本への帰還メカニズムを検討している。
- <sup>(4)</sup> 決して全ての第二世代が「日本に帰還する」という進路を希望・選択しているわけではない。筆者は調査の過程において、「日本には帰還しない」という選択し、現地化していく日本人青年とも出会っている。日本に帰還せずグアムで生きていくという選択をした理由として、「日本」との日常的・非日常的な接触がネガティブに経験されたことや、「グアム」において深い交友関係に埋め込まれていたことが語られた。
- <sup>(5)</sup> 日本への接続という面では「成功」したものの、その後の大学生活において困難が生じたり、日本社会に不適應になったりしたことによりグアムに戻る第二世代もいる。長期的なスパンで「日本への帰還」を捉えた場合、「帰国生」として日本に帰還することが必ずしも「成功」であるとは限らないことは、留意すべき点である。
- <sup>(6)</sup> 筆者はこれまで 19 名の日本人青年 (高校生 12 名、就労者 7 名) にインタビューを実施している。就労者 7 名のうち、帰還移住を望んでいた者／試みた者は 5 名であった。今回は、その 5 名のうち 3 名を取り上げている。なお、高校生に対するインタビューの結果については、芝野 (2016) を参照のこと。
- <sup>(7)</sup> 登場する人物名は、すべて仮名である。プライベート

シーを保護するため、人物に関する情報は一部改変している。本人と相談の上、本論に支障をきたさない程度に加工を施した部分もある。

## 文献

- Back, L., 2007, *The Art of Listening*, Oxford: Berg Publishers. (=2014. 有元健訳『耳を傾ける技術』せりか書房.)
- Bolognani, M., 2014, “The Emergence of Lifestyle Reasoning in Return Considerations among British Pakistanis,” *International Migration* 52 (6):31-42.
- 江淵一公, 1994, 『異文化間教育学序説——移民・在留民の比較教育民族誌的分析』九州大学出版会.
- 外務省, 2015 年度, 「海外在留邦人数調査統計」.
- Goodman, R., 1990, *Japan's “International Youth”: The Emergence of a New Class of Schoolchildren*, New York: Oxford University Press. (=1992, 長島信弘・清水郷美訳『帰国子女——新しい特権層の出現』岩波書店.)
- Guam Bureau of Statistics and Plans, 2014, *Guam Statistical Year Book 2014*.
- ハージ・ガッサン, 2007, 「存在論的移動のエスノグラフィ——想像でもなく複数調査地的でもないディアスポラ研究について」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う——現代移民研究の課題』有信堂高文社, 27-49.
- Hammar, T., 1990, *Democracy and the Nation State*, Aldershot: Gower.
- 井田頼子, 2015, 「日本の大学の帰国生入試における多様性とその帰結」『ソシオロゴス』39:45-60.
- 稲田素子, 2012, 「帰国生徒の受け入れにおける公平さをめぐって——実績のある受け入れ高校を事例に——」『異文化間教育』36:40-56.
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人, 2005, 『顔の見えない定住化——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会.
- King, R., and, Christou, A., 2014, “Second-Generation ‘Return’ to Greece: New Dynamics of Transnationalism and Integration,” *International Migration* 52 (6):85-99.
- 小林哲也編, 1983, 『異文化に育つ子どもたち』有斐閣選書。
- Levitt, P. and Waters, M.C. (eds.), 2002, *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, New York: Russell Sage Foundation, 168-208.
- 松谷実のり, 2014, 「現地採用移住の社会学序説——グローバル化時代の多様な移住経験」『京都社会学年報』22:49-68.
- 南川文里, 1999, 「滞留状況と移民企業家——ロサンゼルス日系移民の歴史社会学的考察から」『年報社会学論集』12:143-54.
- , 2005, 「『在米日系人／在外日本人であること』の現代的意味——エスニシティの現代社会論に向けて」『立命館言語文化研究』17 (1):137-43.
- 水上徹男, 1995, 「ソジョナー——国境を越えた人の移動とセツルメント形態」『年報社会学論集』8:131-42.
- 長友淳, 2013, 『日本を「逃れる」——オーストラリアへのライフスタイル移住』彩流社.
- 額賀美紗子, 2013, 『越境する日本人家族と教育——「グローバル型能力」育成の葛藤』勁草書房.
- O'Reilly, K., 2012, *Ethnographic Methods (second edition)*, Oxon: Routledge.

- Portes, A., and Ruben, R., 2014, *Immigrant America: A Portrait (Forth Edition)*, Oakland: University of California Press.
- 佐藤郡衛, 1997, 『海外・帰国子女教育の再構築——異文化間教育学の視点から』玉川大学出版部。  
——, 2005, 「帰国生徒受け入れと特別入試の意義と課題——『積極的差別是正策』の視点から」『国際教育評論』2:76-89.
- 関恒樹, 2013, 「越境する子どものアイデンティティと『家族』の表象——アメリカ合衆国におけるフィリピン系 1.5 世代移民の事例から」『文化人類学』73 (3):367-98.
- 関口礼子, 1983, 「異文化での家庭環境と子どもたち」小林哲也編『異文化に育つ子どもたち』有斐閣選書, 108-30.
- 芝野淳一, 2016, 「国境を越える移動実践としての進路選択——グアムに住む日本人高校生の存在論的移動性に着目して」『異文化間教育学』43:104-18.
- 芝野淳一・敷田佳子, 2014, 「在外教育施設におけるトランスナショナル化の実態——グアム日本人補習校の保護者に対するアンケート調査より」『教育文化学年報』9:28-41.
- 渋谷真樹, 2001, 『「帰国子女」の位置取りの政治——帰国子女教育学級の差異のエスノグラフィー』勁草書房.
- Tsuda, T., 2009, “Global Inequities and Diasporic Return: Japanese American and Brazilian Encounters with the Ethnic Homeland,” In Tsuda, T., (ed.), *Diasporic Homecomings: Ethnic Return Migration in Comparative Perspective*, California: Stanford University Press, 227-59.
- Wessendorf, S., 2013, *Second-Generation Transnationalism and Roots Migration: Cross-Border Lives*, Aldershot: Ashgate.
- 山口誠, 2010, 「米領グアム島にみる日本人観光の特性とその歴史性」『関西大学経済・政治研究所 調査と資料』107:97-111.
- 吉原直樹・今野裕昭・松本行真, 2016, 『海外日本人コミュニティとメディア・ネットワーク——バリ日本人社会を事例として』東信堂.

(しばの じゅんいち 大阪成蹊大学教育学部 shibano@osaka-seikei.ac.jp)  
(査読者 中島智子、三浦綾希子)

# The Structural Constraints in Second-Generation Migrants' Return Migration Process: A Case Study of Japanese Young Adults in Guam

SHIBANO, Junichi

The aim of this paper is to explore the experiences of “returning to the ancestral homeland” of the second-generation Japanese migrants in Guam who have not been covered in the field of overseas Japanese studies. The main research targets in this monograph are young adults who have stayed in, or come back to Guam despite they hoped to settle down in Japan. From this respect, focusing on the contexts of reception for migrants (labor market, ethnic communities, government policies of migrants) both in Japan and in Guam, I analyzed and discussed the causes of their difficulty of return migration. The result showed that, in the process of their return migration, they were ripped apart by the contexts of reception in Japan, while they were pulled strongly by the contexts of reception in Guam. This result implicates that it's important to take up the second -generation Japanese migrants as “global non-elite” in the field of overseas Japanese studies, and to discuss their migration experiences from the perspective of structural constraints in multiple places.